176
60

聯珠百人一首

聯珠

東京圖書館藏

甲午夏日
道樞題

序

世にあまねくもてはやさるゝ百人一首の圖
をあつめし書林数多ありといへども似よりたるも
ものなし今度此道の人々の古きを尋ね出て
梓に刻する一本の圖となし書
肖像をして其美しきを盡させ
もつはらを畫する樹老人の筆をかり
しるしたるゝ

甲午安日

画稿帖

序

世にありふれたる百人一首の図
そのうちの書肆ふるくよりも似せてこゝろざし
すゑの風して今尾陽の名ある東璧堂主
翁に刻すべきの一本を需めて図を書写
ゆへして実によろしき本なりとこの図は
そのまゝ名画家樹老人の筆にて遊歴
し[illegible]古実とふりつるそのこゝろを留め奈

うれまをて艶しなりしを晩年にいたりて
いろそそと剞劂となしてあまねく世の人を
まもこそハやといひてありしにその事は
叶ハずして身まかりしハは其のあとを
近藤久敬なる其の志を継て本緑堂と
かるものに出版して雛形なりとき画者の
京図とゆりてあれをもて出版をゆめし
てあるに書がうるさるその事ハこれは京師

まを古体の名高き本おもけ繍の書名
なり之画名華美に見ん人の友なれバ孔
よりはるかに古事を挑しぬしのなり其巻
頭に東久世通禧伯の書にて勝珠の
二字を冠らせてありこの本に對する
好文字なまはすれバ勝珠百人一首と
名つけて通常なるとしこれを定めなかるの
思ひくとのひたることをうるの幸福に　神堂

こゝにもよむべきふみとなるべし　戸ごとにまなべ天下
の寶ひとつ加はりたらんとおもふなどもな
りこゝにおいてはしがきとなすこと
かくのごとし

明治廿七年八月　萬松園の
あるじ
福羽美静

ひとの恩恵をうくるその忠信よりて
すなほなる心なり節婦なるなりなりけり
ふるくより昆虫草の類をあつめし百年
となれるをその百人一首をよみは数副
書の中にはいとうたをよみしめあまた
加謂多として詩歌を使ひたまふことのへに
ここはや草はかたよりせに流くあまねく
せられたる類なんなきさてかく世にそて

はやさるゝ、そのおほかるまでなどの画をまじ
彩の筆も図置して いとさやかにかゝ
れ候文なのはて めでにえ そのあらはれ
ぬれめりて児童婦女子の思ひ王勧化
すむこと王ほりするは理外のことならまし
こたひ東壁堂の主ある人のすゝめにて
教の筆者も此の道者もその道この博士とも
いふ通人ほどの大家なりけるは書画ともに

高尚なる閑雅にして品類なき好本なれはそ
うへる聯珠百人一首とは名づけられし
なるべくこそひらかなに歌を注釈するに及ぼそ
彼の児童婦女子の遊戯中にも言の葉の
いの思ひを王高尚婦雅にし導くの効ある
そのよろへきは通この本のなれる由よりは
師翁福羽大人の序文に詳悉なれば今さら
いはずもし きる王この本のこよなくてはさ

[illegible]陸出世之花

きた遠藤芳樹翁の計畫ちらふしころ
よりちかきころまでそのあひだあだにつけ
そのさる事のありつる縁よりていつ序
に一言かきそへよと来阪事のこひによ
りてかきのまゝをしるしたるなり

明治二十七年八月

早稲田乃五十代田の田夫加部の識

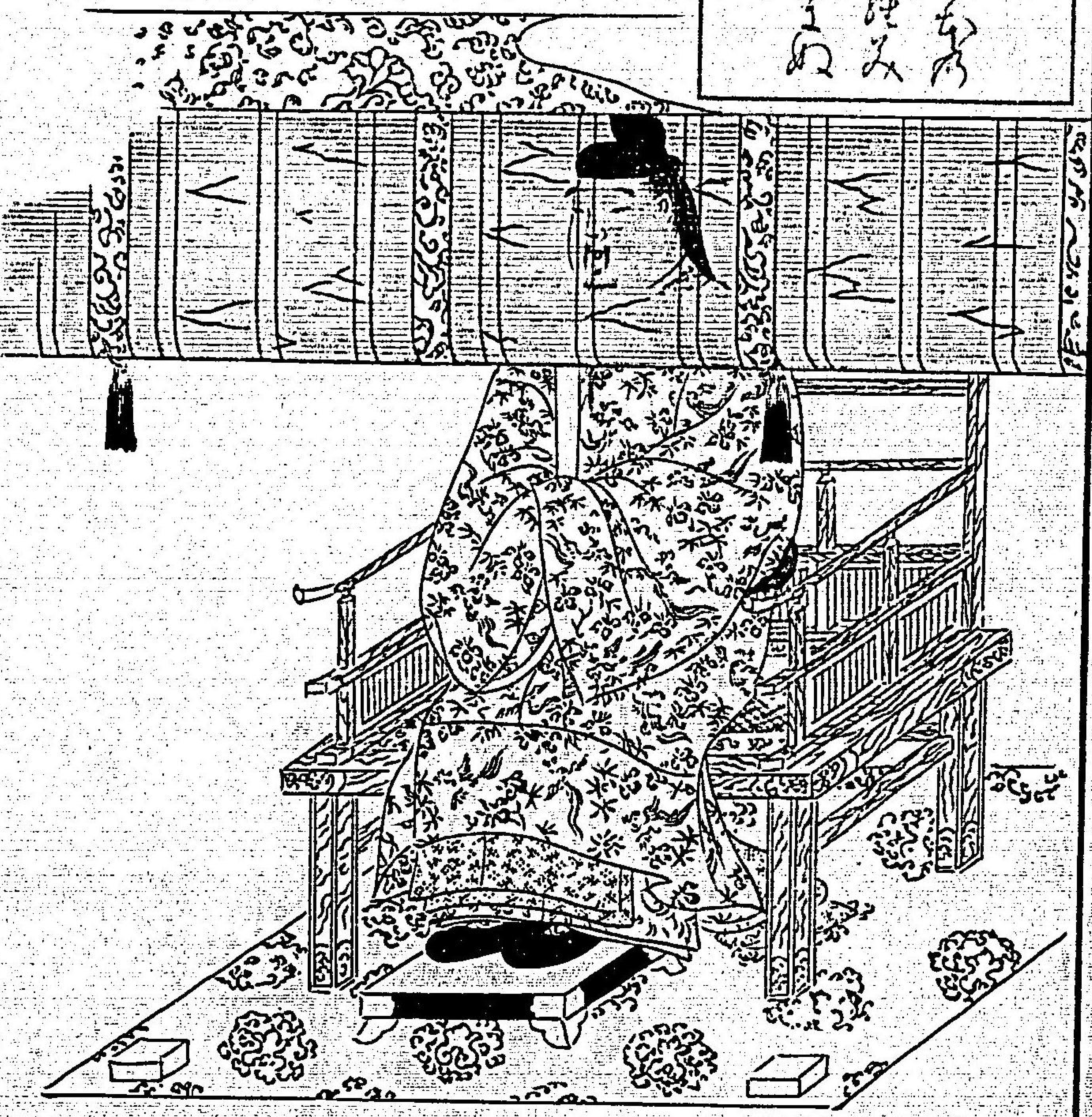
東京圖書館藏

東陸 出世噺

きた邑藤芳齋ぬしの何書きらはし
よりちかきころまでものゝ聞えに合せ
そのさる事のありつる縁よりていさゝか
に一言かきそへよと本屋某のこひによ
りておもふまゝをしるしあたふるなり

明治二十七年八月

早稲田の五十代目の主人 柳村の書



天智天皇

あきの田のかりほの
いほのとまをあらみ
わかころもてはつゆにぬ
れつゝ

持統天皇

春すきて夏きにけ
らししろたへの
ころもほすてふあま
のかくやま

柿本人丸
足引の山鳥乃
尾のしたりをの
なかなかし夜を
ひとりかもねん

山邊赤人
たこの浦にうち出て
見れはしろたへの
ふしのたかねに
ゆきはふりつゝ

猿丸大夫

をくやまにもみち
ふみ分鳴鹿の
こゑきく時そ
秋はかなしき

中納言家持

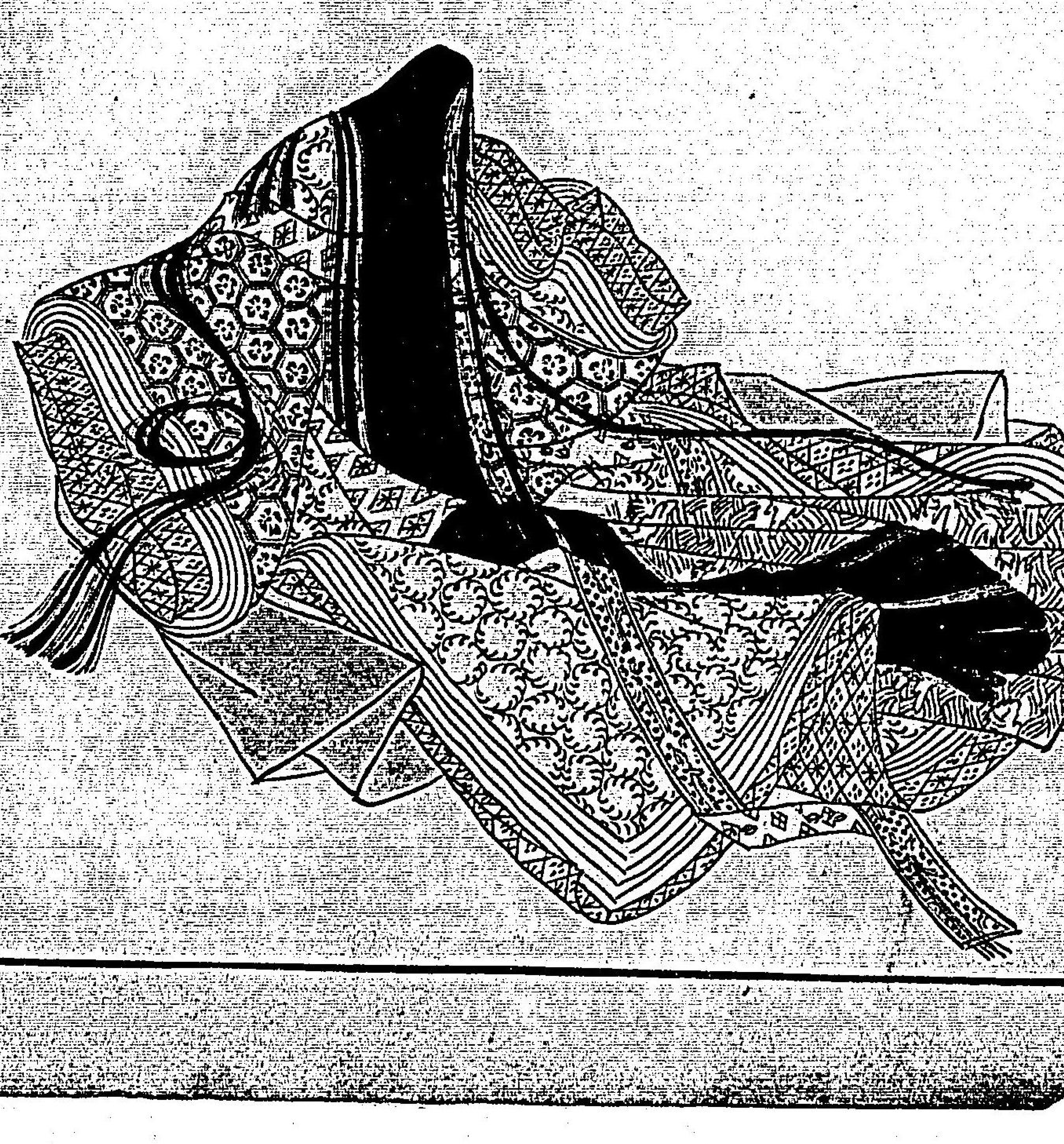
かさゝきの渡せる
はしにおく霜の
白きを見れは
夜そふけにける

安倍仲麿
あまの原ふりさけみれは
かすかなる
みかさの山に
いてし月かも

喜撰法師
我庵は都乃
たつみしかそすむ世を
うちやまと
人はいふ也

小野小町

花のいろはうつりにけりな いたづらに
我身よにふる ながめせしまに



蟬丸

これやこの行も かへるも わかれては
しるも しらぬも 逢坂の せき

参議篁

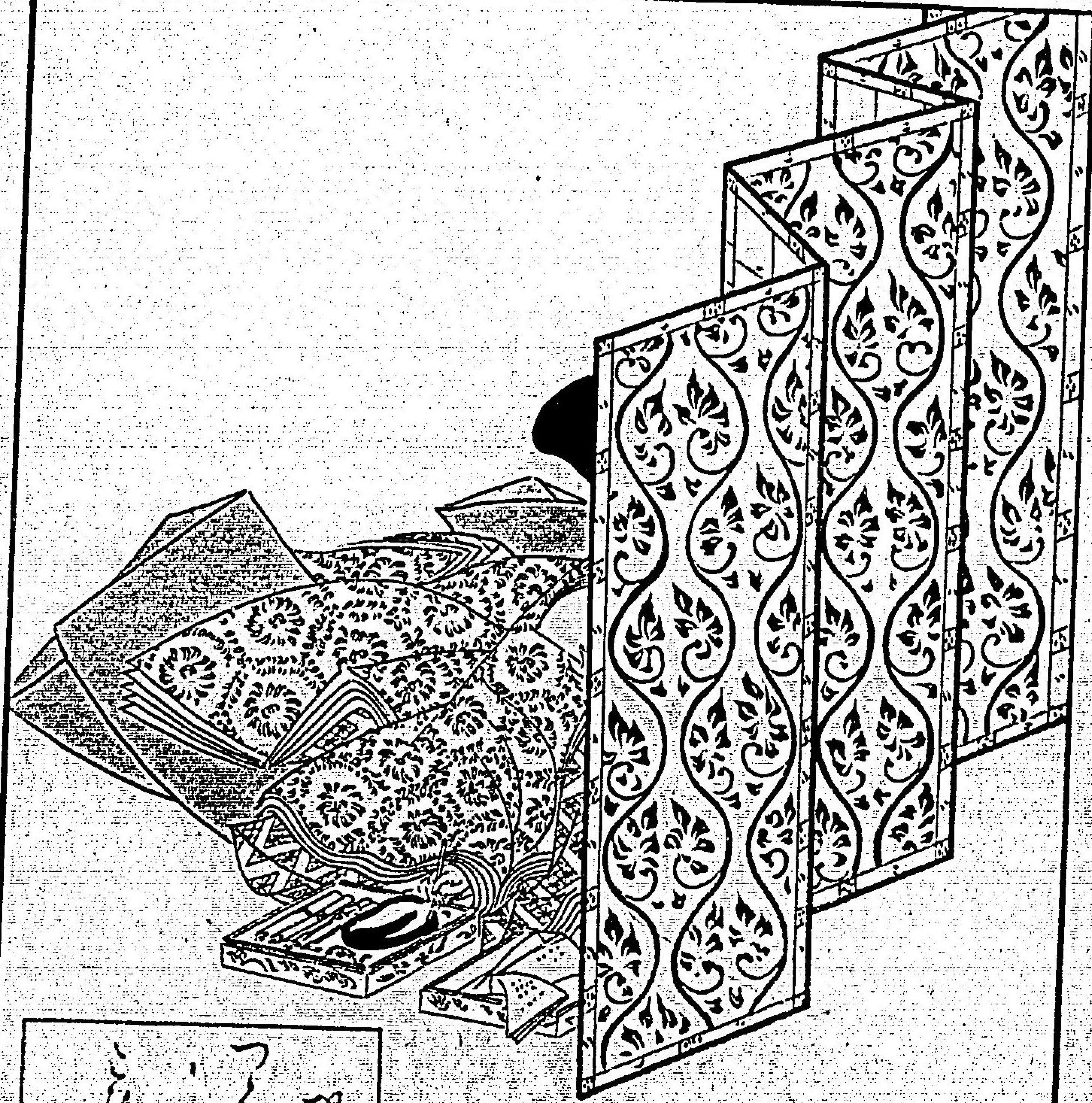
わたのはら八そ嶋かけてこきいてぬと人にはつけよあまのつりふね

あまつかせ雲のかよひち吹とちよをとめのすかたしはしとゝめん

僧正遍昭

陽成院

つくはねのみねより
おつるみなの川
こひそつもりて
ふちとなりぬる



河原左大臣

みちのくのしのふもちすり
たれゆゑに
みたれそめにし
われならなくに

君かため はるの野に出て わかなつむ わか衣手に 雪はふりつゝ

光孝天皇

中納言行平

たち別れ いなはの山の 峯におふる まつとしきかは 今かへりこむ

在原業平朝臣

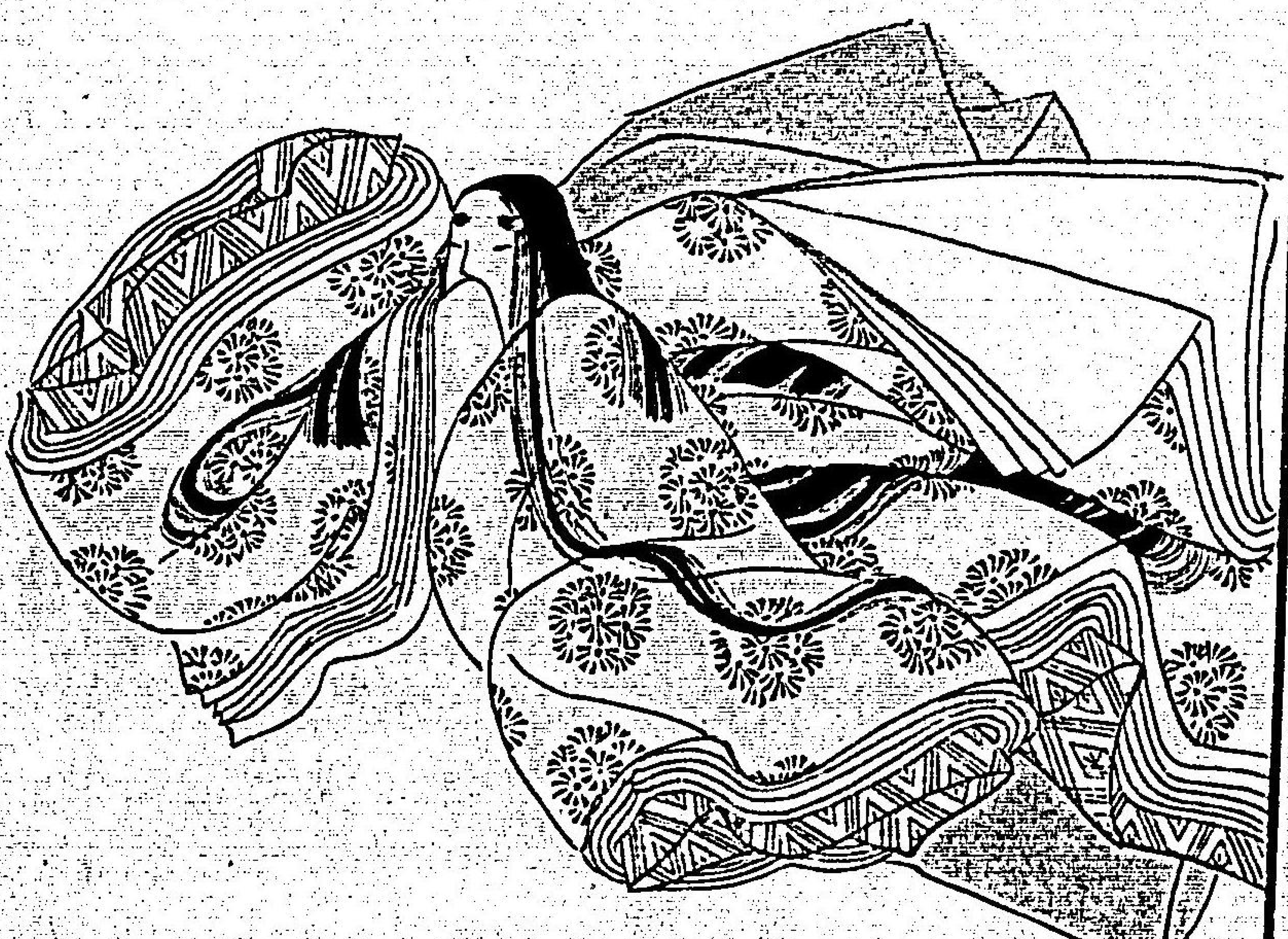
ちはやふる神代もきかす竜田川
からくれなゐに水くゝるとは

住の江の岸による波よるさへや
夢の通ひ路人めよくらむ

藤原敏行朝臣

伊勢

難波かたみしかきあしの
ふしのまも
あはてこの世を
すくしてよとや



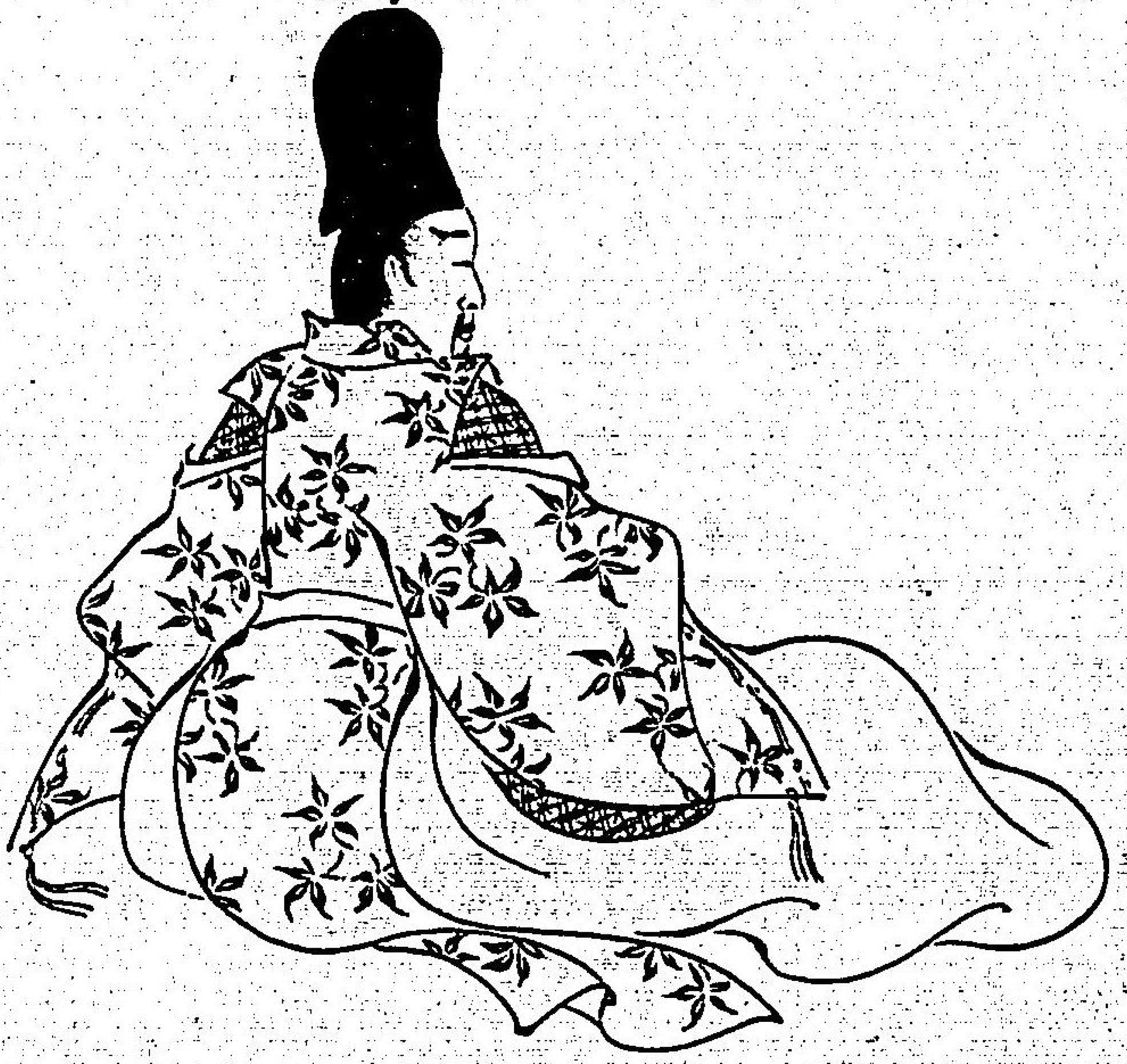
元良親王

わひぬれは今はた
おなしなにはなる
みをつくしても
あはむとそ思ふ

素性法師

いまこむと　ありあけの
いひし　つきを
はかりに　まちいて
なかつ　つる
月乃　かな

むへ山風を
あらしと
吹からに秋の　いふらむ
草木の
しをるれは
文屋康秀



大江千里

月見れはちゝにもの
こそかなしけれ
わか身ひとつの
あきにはあらねと

菅家

このたひは
ぬさもとり
あへす
たむけ山
もみちのにしき
神のまにまに

三條右大臣

名にしおはゞあふさか山のさねかつら

人にしられてくるよしもかな

貞信公

をくら山みねのもみぢ葉こゝろあらば

今ひとたびのみゆきまたなむ

中納言兼輔

みかのはら
わきて
なかるゝ
いつみ川
いつみきとてか
恋しかるらん

源宗于朝臣

山里は冬そさひしさ
まさりける
人めも草も
かれぬとおもへは

凡河内躬恒

心あてにをらはやをらむはつしもの
おきまとはせるしら菊の花

壬生忠岑

有明のつれなくみえしわかれより
あかつきはかりうきものはなし

あさぼらけ
有明の月とみるまでに
坂上是則
よし野乃里に
ふれるしら雪

春道列樹
山川に　なかれも
風の　あへぬ
かけたる　もみち
しからみ、　なり
は　けり

紀友則

ひさかたのひかりのとけき春の日に
しつ心なく花のちるらむ

藤原興風

たれをかもしる人にせむたかさこの
松もむかしのともならなくに

紀貫之

人はいさ心も
しらず
ふるさとは
花ぞむかしの
香ににほひける

清原深養父

なつの夜はまだ
よひながらあけ
ぬるを
雲のいづこに
月やどるらむ

しら露に風の
ふきしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉そちりける

文屋朝康

右近

わすらるゝ身をは思はす
ちかひてし
人のいのちの
をしくも
あるかな

参議等

あさちふの
小野のしのはら
しのふれと
あまりてなとか
人のこひしき

平兼盛

しのふれと
いろにいてにけり
わかこひは
ものやおもふと
人のとふまて

壬生忠見

こひすてふわかなは
またきたちにけり
人しれすこそ
おもひそめしか

清原元輔

ちきりきな
かたみに
そてを
しほり
つゝ
末の
まつ山
なみこ
さし
とは

中納言敦忠

逢見ての
のちの心に くらぶれは
むかしは ものを
おもはさりけり

中納言朝忠

あふことのたえてし
なくはなかなかに
人をも身をもうらみ
さらまし

謙徳公

あはれともいふへき
人はおもほえて
みのいたつらに
なりぬへきかな

ゆらのとをわたる舟人
かちをたえ
ゆくゑもしらぬ
こひのみちかな
曽祢好忠

恵慶法師

大中臣能宣朝臣

みかきもり衛士のたく火は
夜はもえて
ひるはきえつゝ
ものをこそおもへ

君かため をしからさりし
命さへ なかくもかなと
おもひけるかな

藤原義孝

藤原義孝

きみかため
をしからさりし
いのちさへ
なかくもかなと
おもひける哉

藤原道信朝臣

明ぬれは
くるゝものとは
しりなから
なをうらめしき
あさほらけ哉

なげきつゝひと
りぬる夜の
あくるまは
いかに久しき
ものとかは
しる

右大将道綱母

儀同三司母

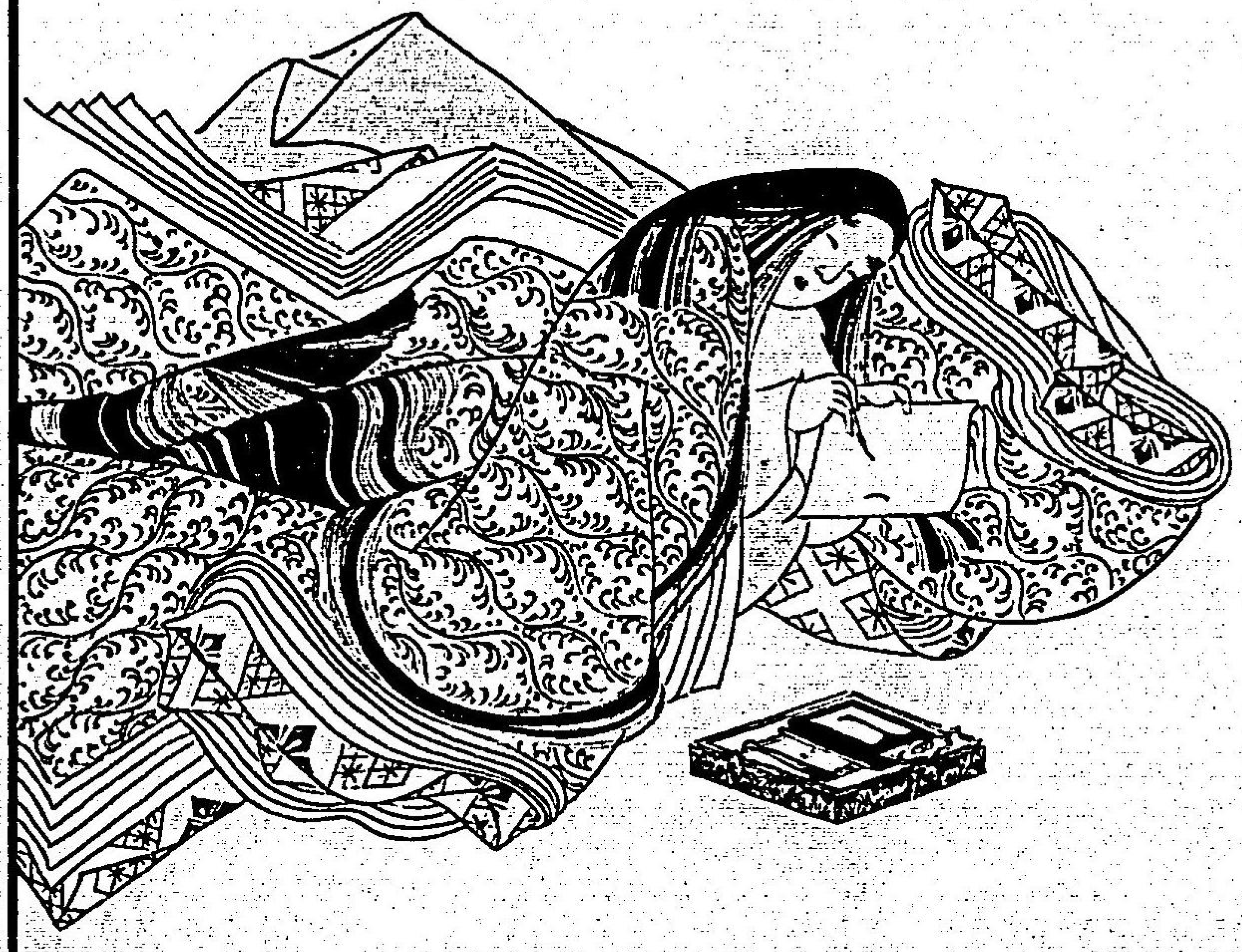
わすれじの行
すゑまではかたけ
ればけふをかぎりの
いのちともがな

大納言公任

たきのおとはたえてひさしくなりぬれと
なこそなかれてなほきこえけれ

和泉式部

あらさらむこのよのほかのおもひ出に
いまひとたひのあふこともかな

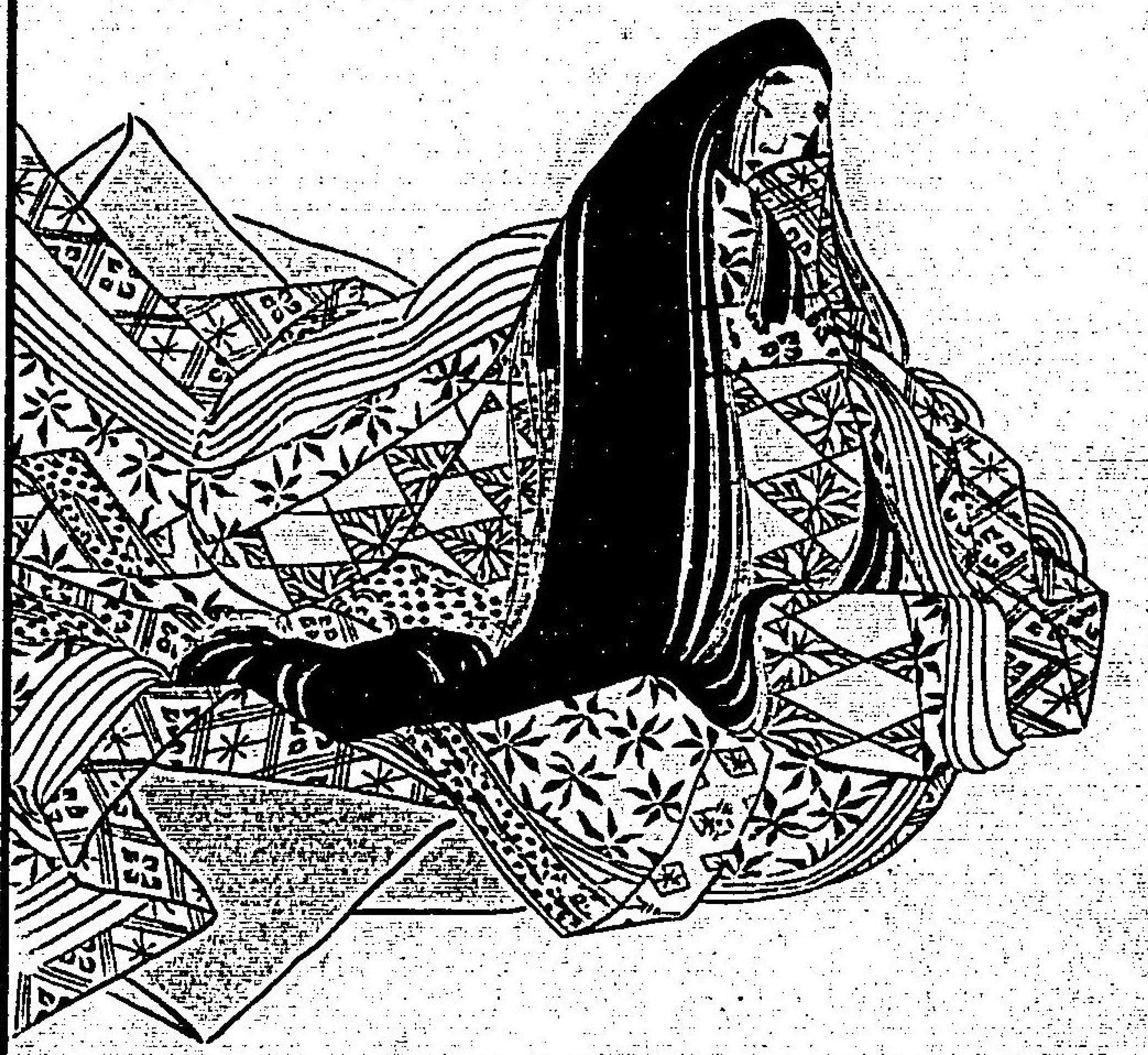


紫式部

めくりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな

有馬山ゐなの笹原風吹けはいてそよ人を忘れやはする

大貳三位



赤染衛門

小式部内侍

伊勢大輔

いにしへの奈良の都の
八重桜
けふ九重に
匂ひぬるかな

清少納言

夜をこめてとりのそらねは
はかるとも
よにあふさかの
せきはゆるさじ

左京大夫道雅

いまはたゝおもひたえなむとはかりを
人つてならていふよしもかな

権中納言定頼

朝ほらけうちの川きりたえ〴〵に
あらはれわたるせゝのあしろ木

相模

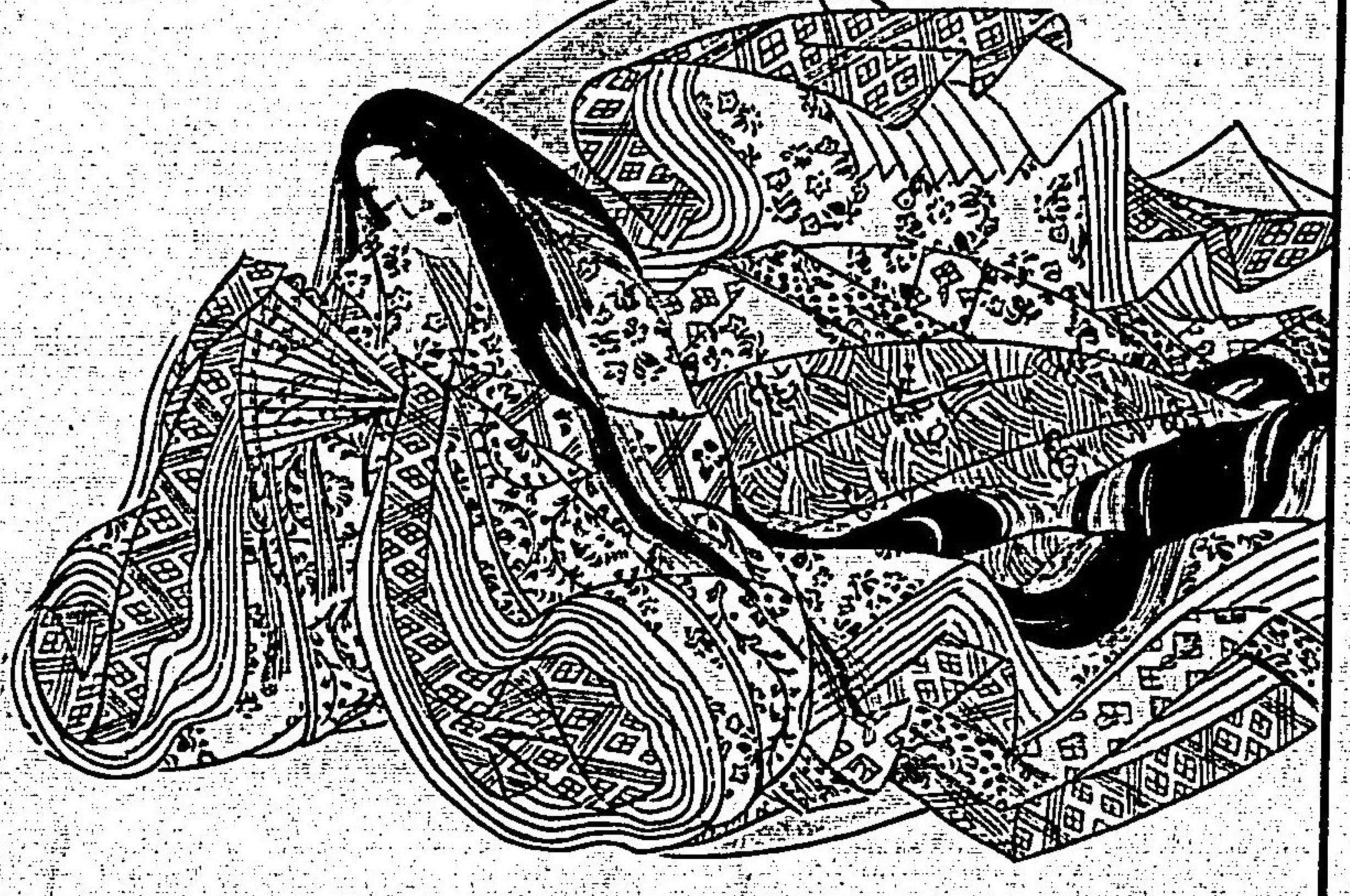
うらみわびほさぬ袖だに
あるものを
恋にくちなん
名こそをしけれ

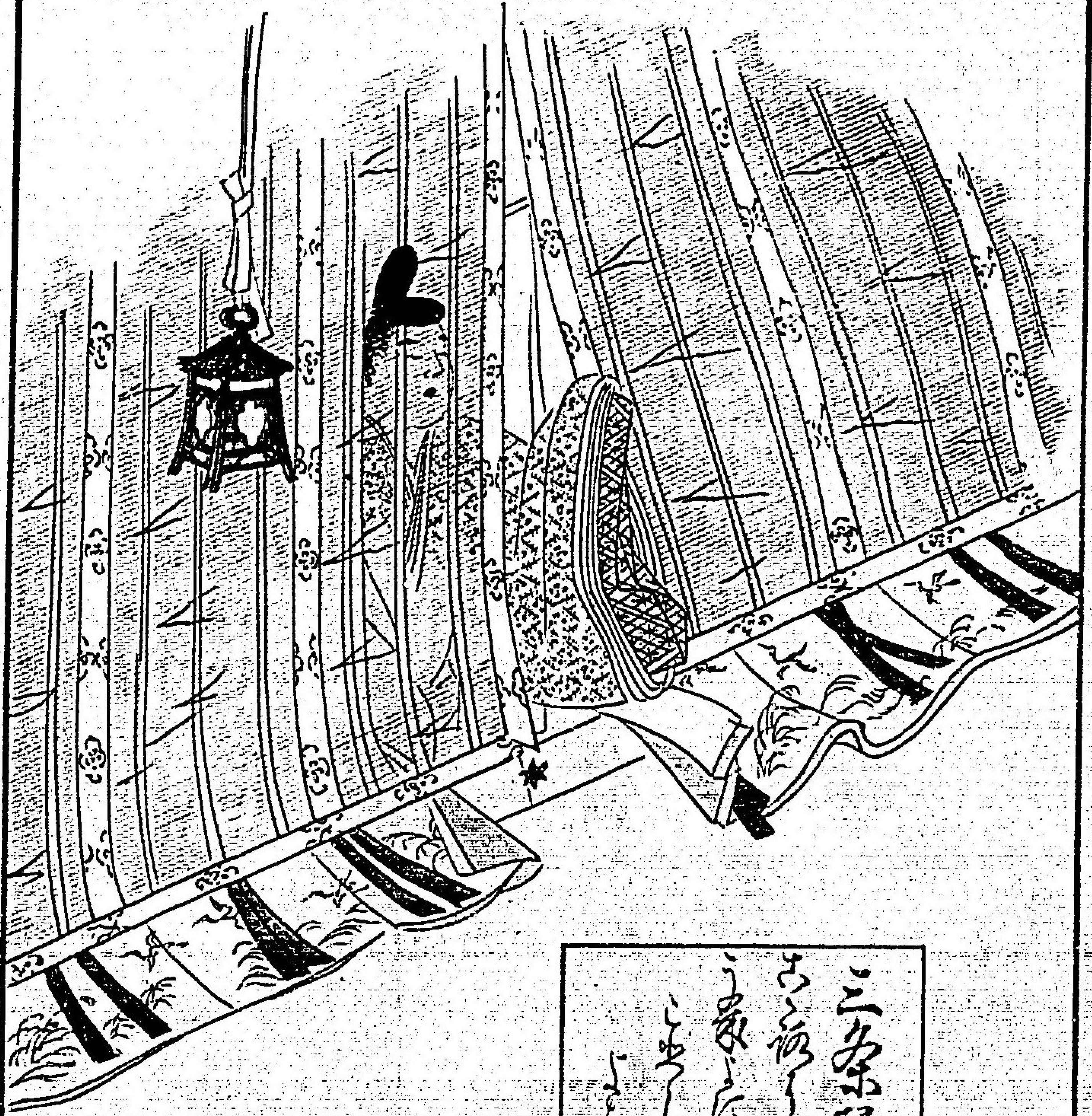
前大僧正行尊

もろともに
あはれとおもへ
やまざくら
はなよりほかに
しる人も
なし

周防内侍

はるの夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれ





三条院

こゝろにもあらでうき世になからへはこひしかるへき夜はの月かな

能因法師

あらしふくみむろの山のもみぢ葉は
たつたの川のにしきなりけり

さびしさにやどをたち出て
ながむればいづこもおなじ
秋の夕ぐれ

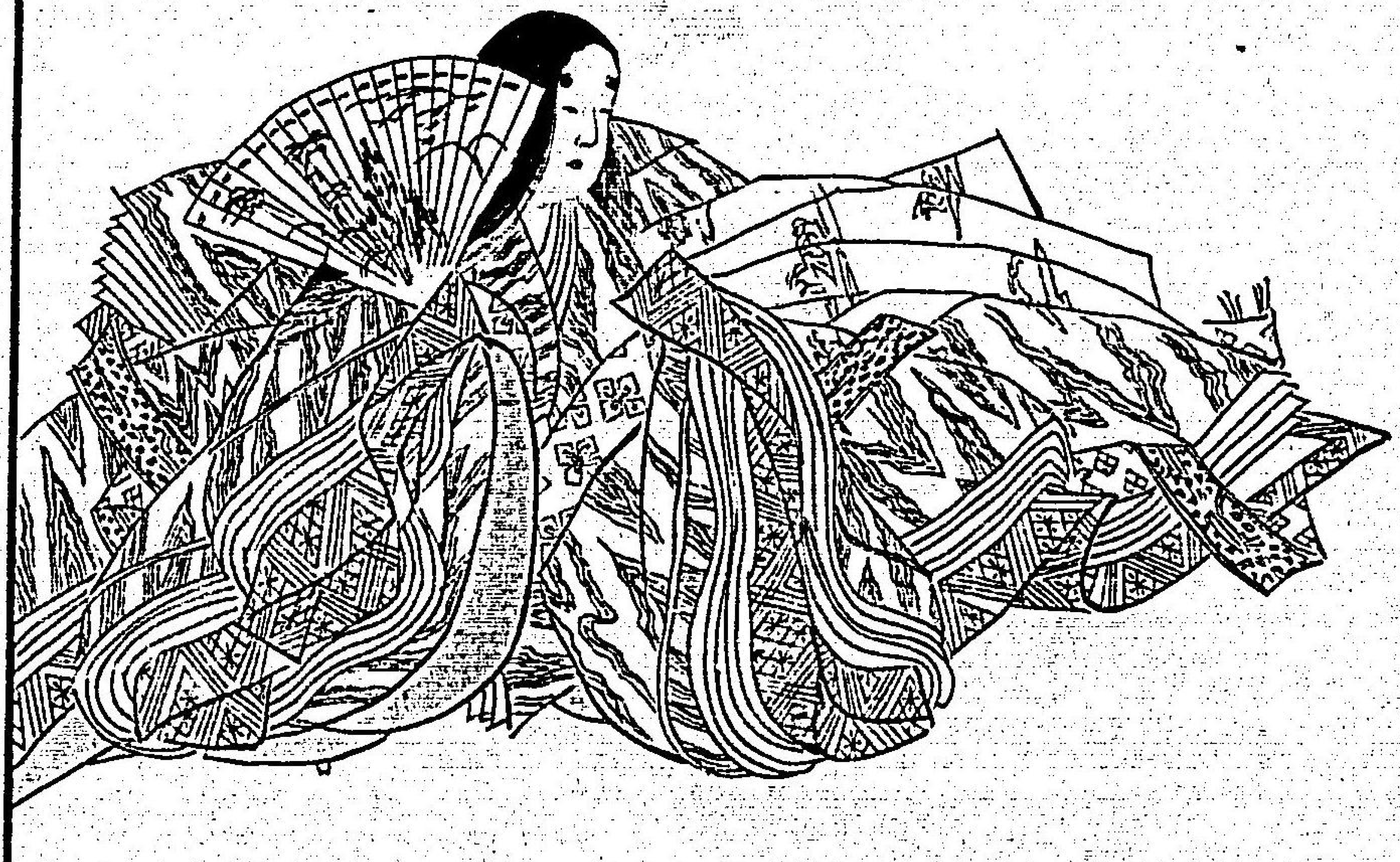
良暹法師

大納言経信

夕されば門田の稲葉
おとづれてあしの
まろやに秋風ぞ
吹く

祐子内親王家 紀伊

音にきく たかしの浜の
あだ浪は かけじや
袖の ぬれもこそすれ



たかさごのをのへの
さくら咲にけり
とやまのかすみ
たゝすもあらなむ
権中納言匡房

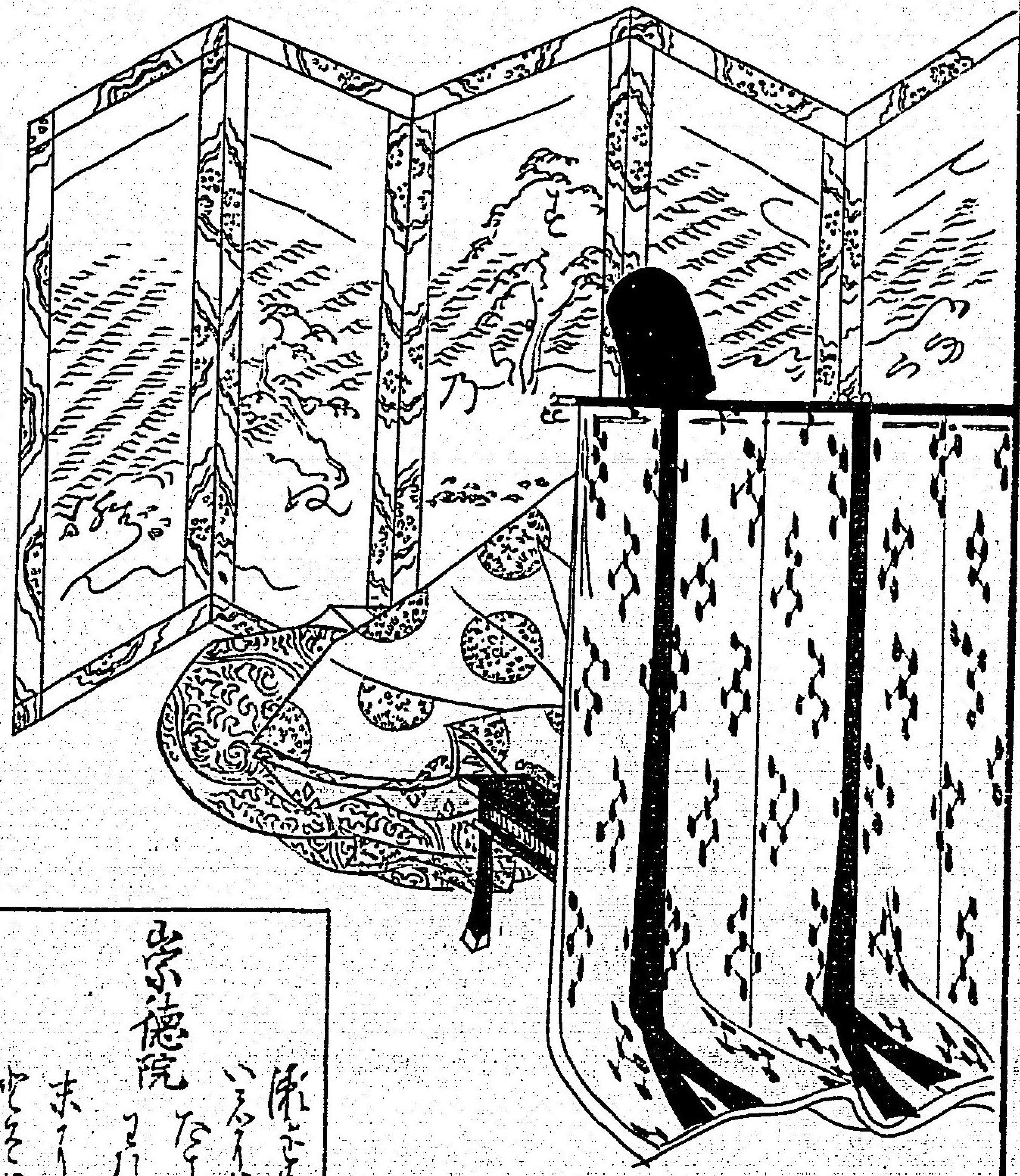
源俊頼朝臣
うかりける
人をはつせの
山おろしよ
はけしかれとは
いのらぬもの
を

藤原基俊

ちきりおきし
させもか露を
いのちにて
あはれことしの
秋もいぬ
めり

法性寺入道前関白太政大臣

わたのはらこきいてゝ
見れはひさかたの
くも井にまかふ
おきつしら
なみ

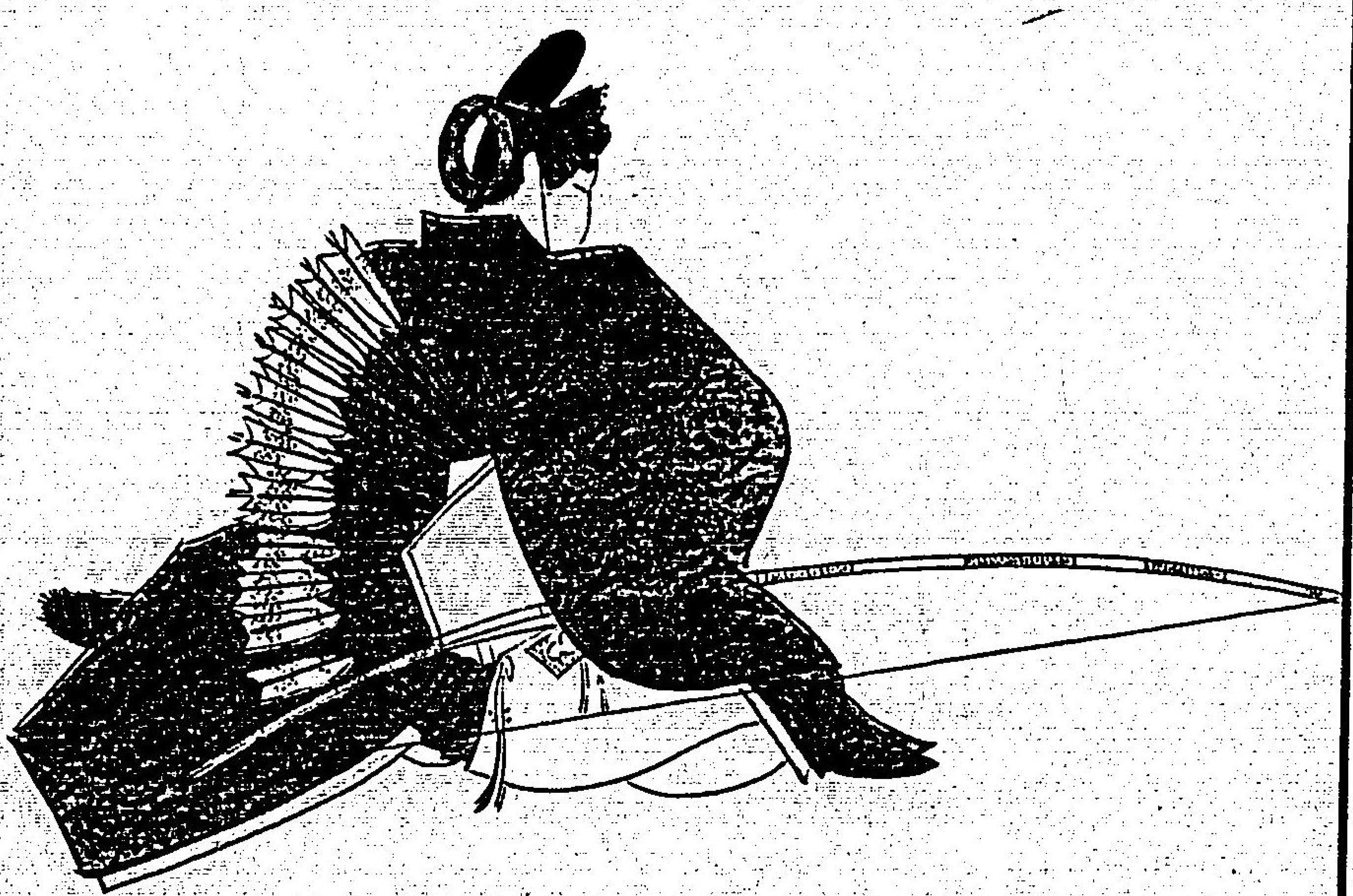


崇徳院

瀬をはやみ
いはにせかるゝ
たきかはの
われても
末にあはん
とそおもふ

源兼昌

あはち嶋
かよふ千鳥の
なくこゑに
いく夜ねさめぬ
すまのせきもり

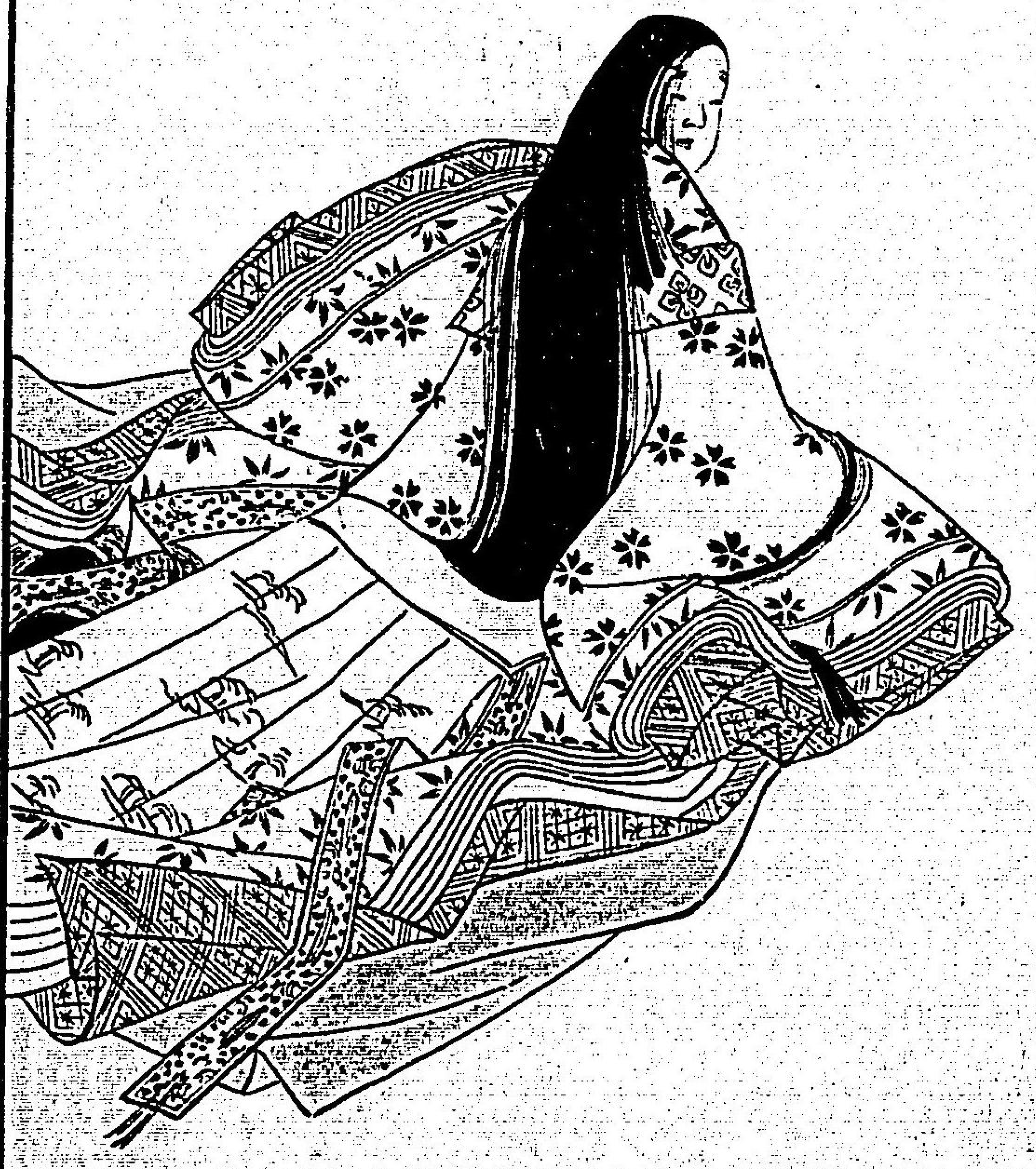


左京大夫顕輔

秋風にたなひく雲のたえまより
もれいつる月のかけのさやけさ

待賢門院堀河

なかゝらむ心もしらす黒かみの
みたれてけさはものをこそ思へ



ほとゝきすなきつる方
をなかむれは
たゝありあけの月そ
のこれる

後徳大寺左大臣

道因法師

おもひわひさても
いのちはあるものを
うきにたへぬは
なみたなりけり

世のなかよみちこそなけれおもひいる
やまのおくにも
しかぞなくなる
皇太后宮大夫俊成

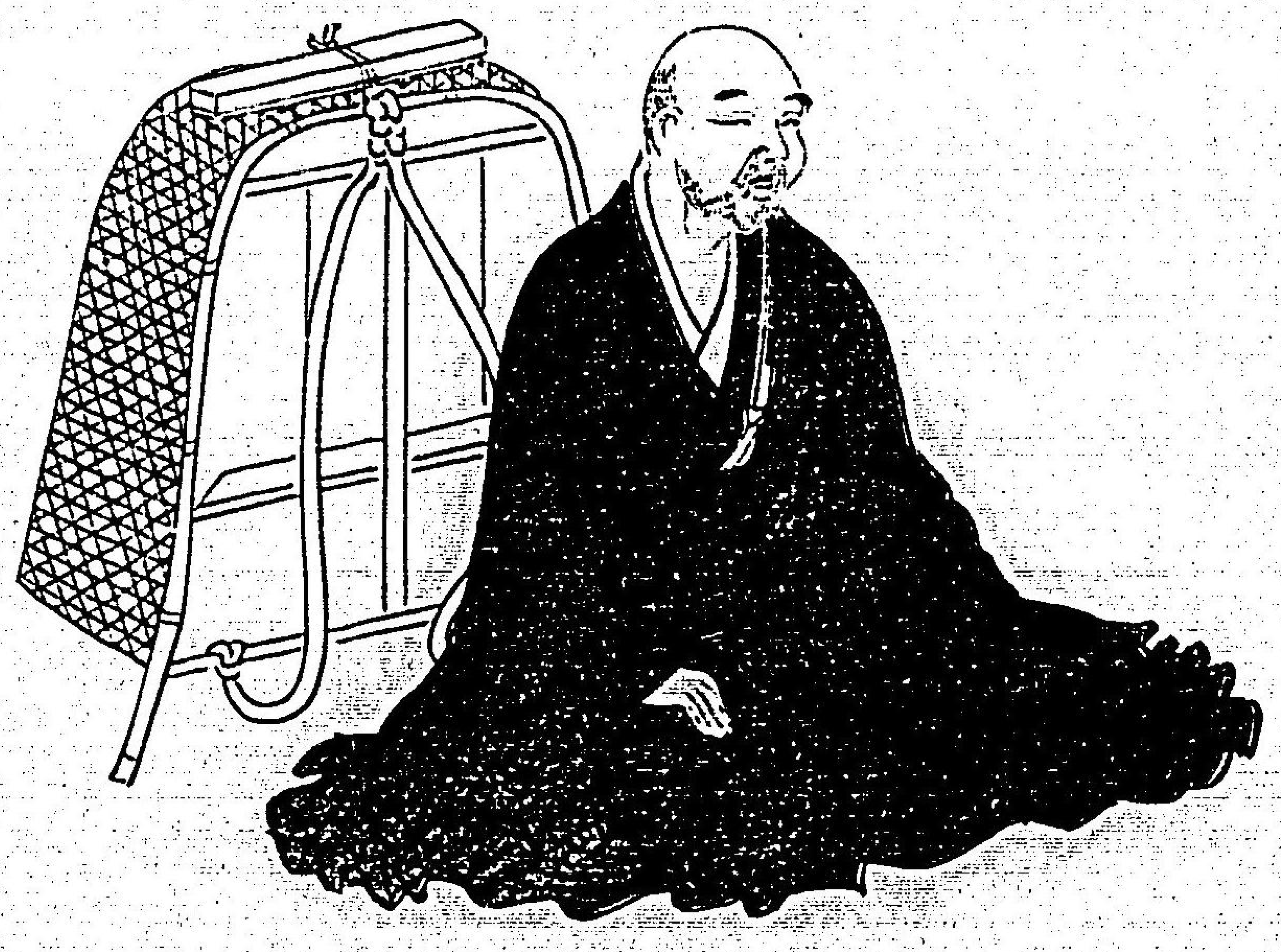
藤原清輔朝臣
ながらへばまた
このごろや
しのばれむ
うしとみしよぞ
いまはこひしき

俊恵法師

よもすがら物思ふころは
明けやらで
ねやのひまさへ
つれなかりけり

西行法師

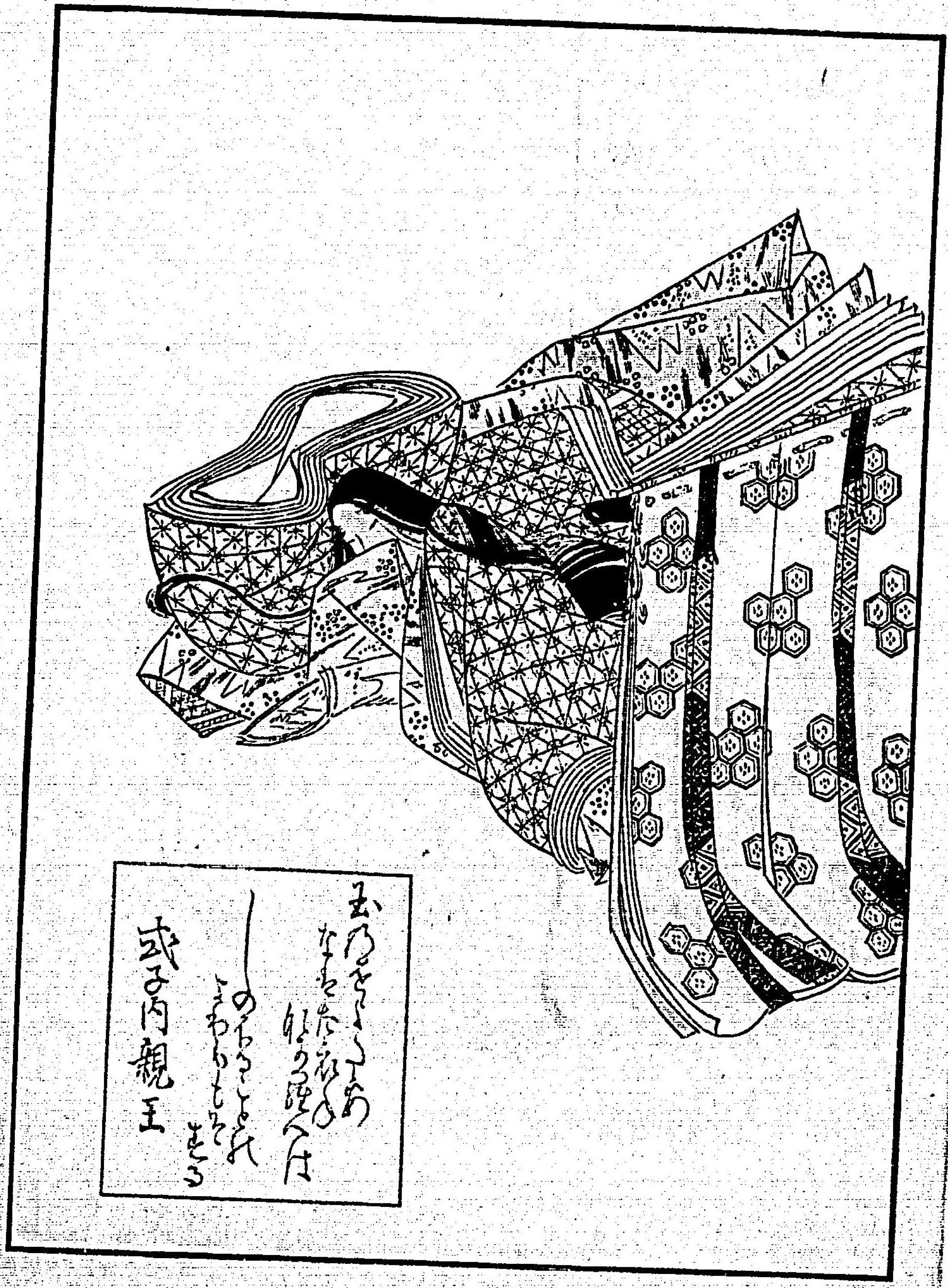
なげけとて月やは
ものをおもはするかこ
ちがほなる我なみだ
かな



寂蓮法師
村雨の露もまだひぬ
まきの葉に霧たちのぼる
秋の夕暮

皇嘉門院別当
難波江の蘆のかりねの
ひとよゆゑみをつくしてや
恋ひわたるべき

殷富門院大輔
みせはやな
をしまのあまの
袖たにも
ぬれにそぬれし
いろはかはらす


玉のをよ
たえなはたえね
なからへは
しのふることの
よわりもそする
式子内親王

後京極摂政
前太政大臣

きりぎりすなくや霜夜の
さむしろに
衣かたしき
ひとりかもねん

二條院讃岐

我袖は
しほひに
見えぬおきの石の
人こそしらね
かわくまもなし

世の中は　つねにもがもな　なぎさこぐ　あまの小舟の　つなでかなしも

鎌倉右大臣

参議雅経

みよし野の　山の秋風　さよふけて　ふるさとさむく　衣うつなり

入道前太政大臣

はなさそふ
あらしのにはの
ゆきならて
ふりゆくものは
わかみなりけり

おほけなくうきよの
たみにおほふかな
わかたつそまに
すみそめのそて

前大僧正慈圓

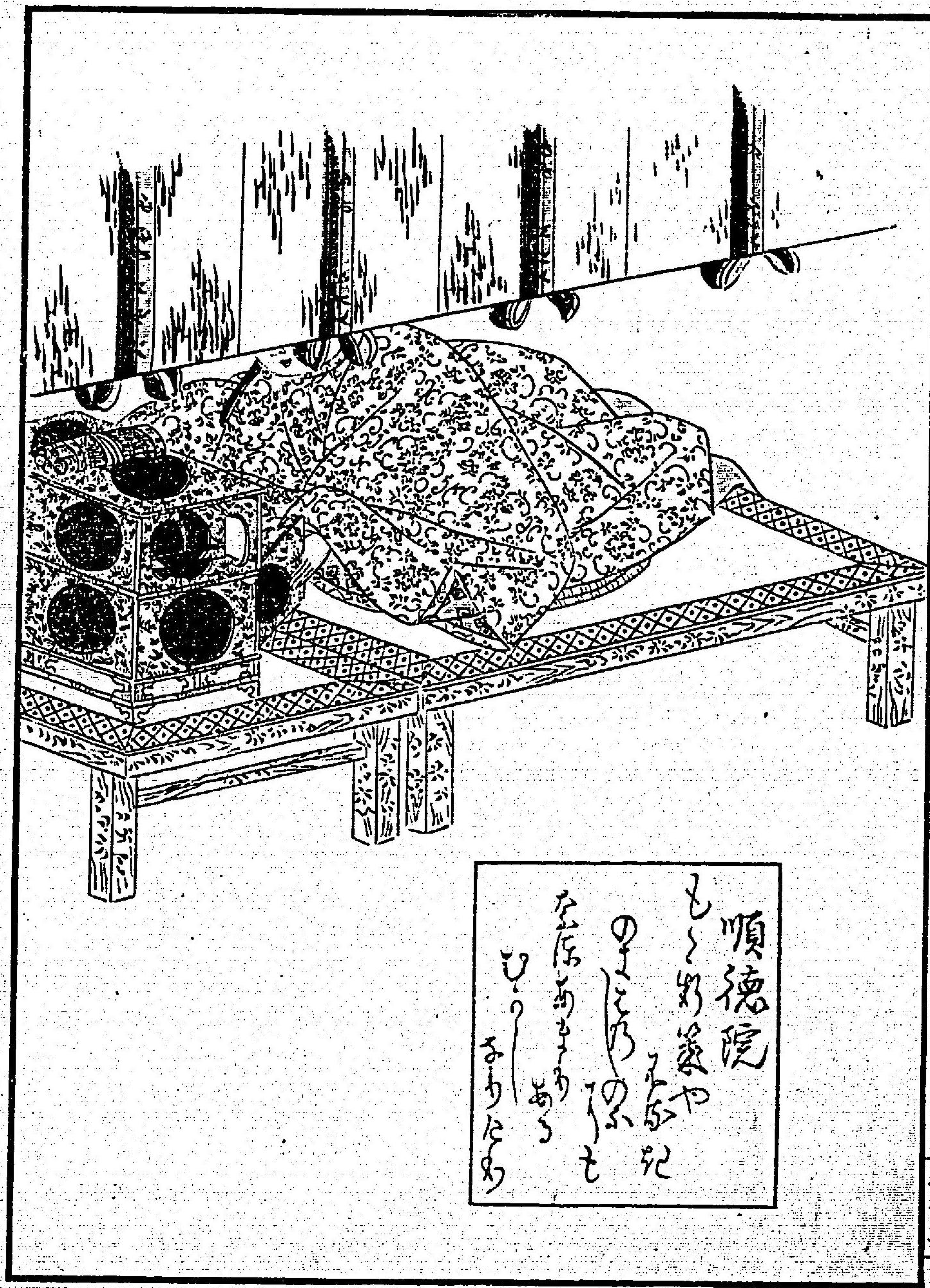
権中納言定家

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ

従二位家隆

風そよくならの小川の夕くれはみそきそ夏のしるしなりける

後鳥羽院


順徳院

藏人所衆關白直廬預正六位下式部少丞菅原朝臣爲恭謹寫之

七十一歳老拙

喜村行納書

ひとの思おもひみるにつけても品位によりて
高き賤きありなりわひ躾節なる事なりしるへくおのおのなり行
ふるくより兒童必要のことはならはし年
としたけたるものの百人一首をかゝれは教訓
書の中にはいとこよなきよしめあるを
加留多として諺語に便ある事をことに
それはかりかり世に流くあまねく
ものすらん翫なきさて　かく世にそて

はいふもさらなり、その人にあらずしては画かきの
歌の筆も図型までいとらしやうにせり、
ゐたるまた本のなくてみだりに書るものあらねば
ひとつありて児童婦女子の思ひを勧化
せむことをほりするは理外のことならず
ここに東壁堂の主来たりてかのすゝめに
歌の筆者も画の作者もその道この博士とも
いひつべきほどの大家なりければ書画ともに

高尚嫺雅にして比類なき好本なればぞ
いへる聯珠百人一首とは名づけられし
なるべくこそひとへに歌を記臆するにも
彼の児童婦女子の遊戯中にもまじらず、
その思ひを高尚嫺雅に導くの効ある
ものといふべき也、この本のなれる由よしは
師翁福羽大人の序文に詳悉されたれば今
こゝにいはじ　さらにこの本のうたにつきてはさ

きた近藤芳樹翁の村書きちかしころ
よりちかきころまでそのり間接にさみけ
さのある事のありつる縁よりていさゝ蔵、
に一言かきそへよと末頃生業のこひにより
探てかきつまんしるしるなり

明治二十七年八月

早稲田乃五十代田の田夫加部の[illegible]

さて世にしられたる人一首に画像の
[illegible]
[illegible]の人[illegible]
[illegible]
[illegible]
安政乃[illegible]田
[illegible]人のよみ人[illegible]
[illegible]乃[illegible]の[illegible]

それゆゑ四方乃浮華を去りし人ぞ時代をしれ
絵画乃理にかなひて画像にも絵を画きて弄る
諸藝にわたりし作家をいとしみ本邦乃妙手
あらんかぎりをあつめかくなりて人ぞしるそ
梅本乃園をおもふ扇子の庵にかよひ給ひぬ
さかしき乃天乃恵みに世をすごしく
実に世の経済をおもひつゝ人生の
おもひ起しより諸の事に彼の筆に

まくら多かしく絵をかいらへつゝ先ゝ子を
ろう山をかなる事をよしぬなりける大家あり
しまこ越る乃おのれ独者の生花なつむしを
名書店手あれ書肆手屋書堂がしるゝゝる
いわひらろ絵を世のまゆうひく人々を
手屋美術よろ絵を出して掛りて見てし
米なれ書とらあれかみいつも様く書
乃ち書田本邦の旋書を翻て出したりしを

[illegible]

明治廿八年五月

[illegible]

定價金貳拾五錢

明治廿八年七月十五日印刷
明治廿八年七月二十日發行

板權所有

編纂者　愛知縣名古屋市玉屋町廿九番戸　片野東四郎

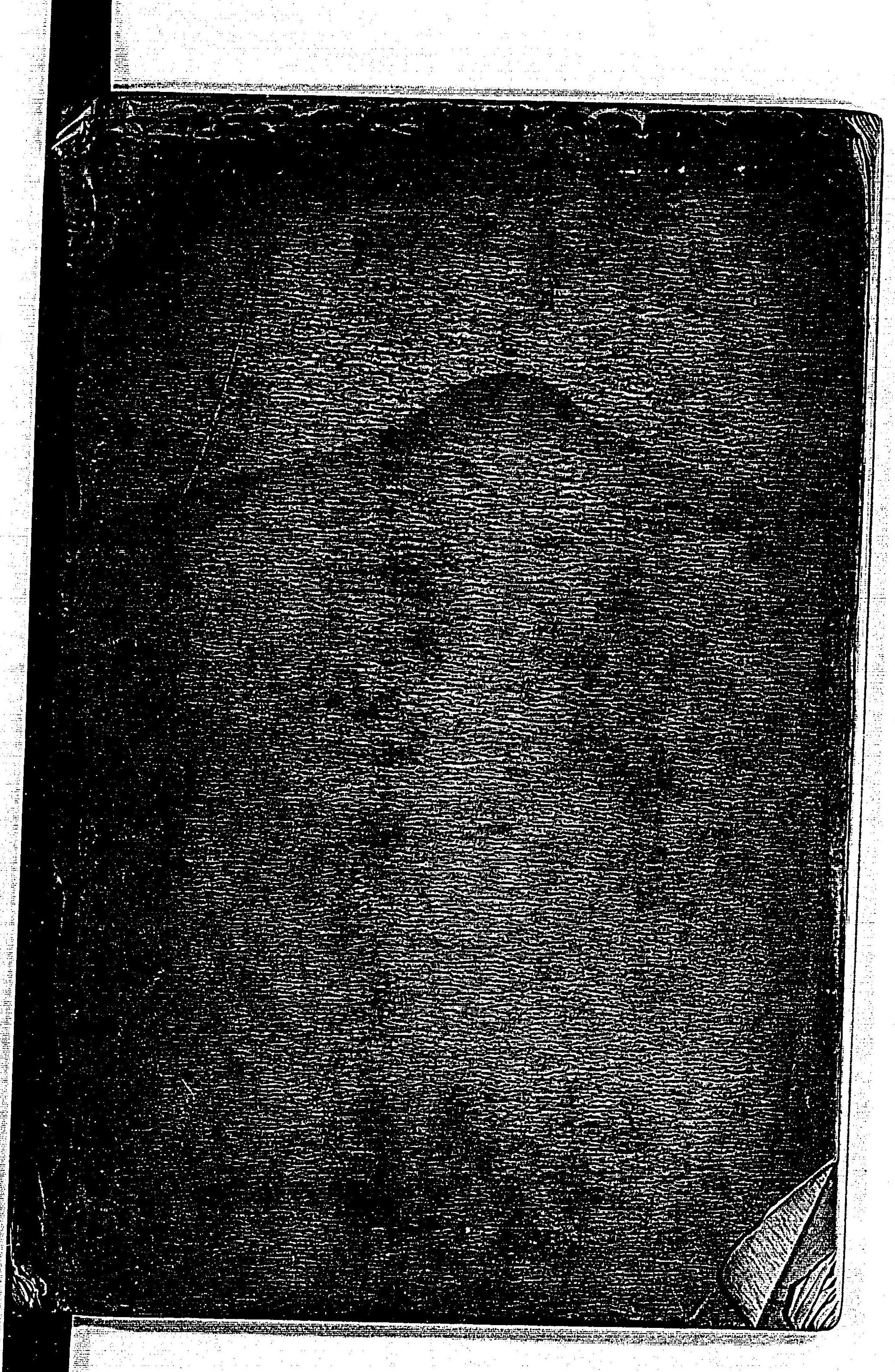
發行兼印刷者　愛知縣名古屋市玉屋町廿九番戸　片野東四郎

發行所　東京京橋區南傳馬町一丁目三番地　片野東四郎支店

176
60

發行所

東京日本橋通壹町目 北畠茂兵衛
東京日本橋通壹町目 大倉孫兵衛
東京日本橋通壹町目 江島伊兵衛
東京京橋南傳馬町二丁目 吉川半七
東京日本橋本町三町目 博文館
東京神田裏神保町 六合館
西京三條通寺町 福井源次郎
西京新町通三條 村上勘兵衛
西京寺町通四條 田中治兵衛
大阪心齋橋筋備後町 吉岡平助
大阪心齋橋筋安土町 赤志忠七
大阪心齋橋筋安堂寺町 田中太左衛門



176
60

086812-000-7

176-60

聯珠百人一首

岡田　為恭／画

M28

DBD-2062